

図1 重鉱物組成および火山ガラス比

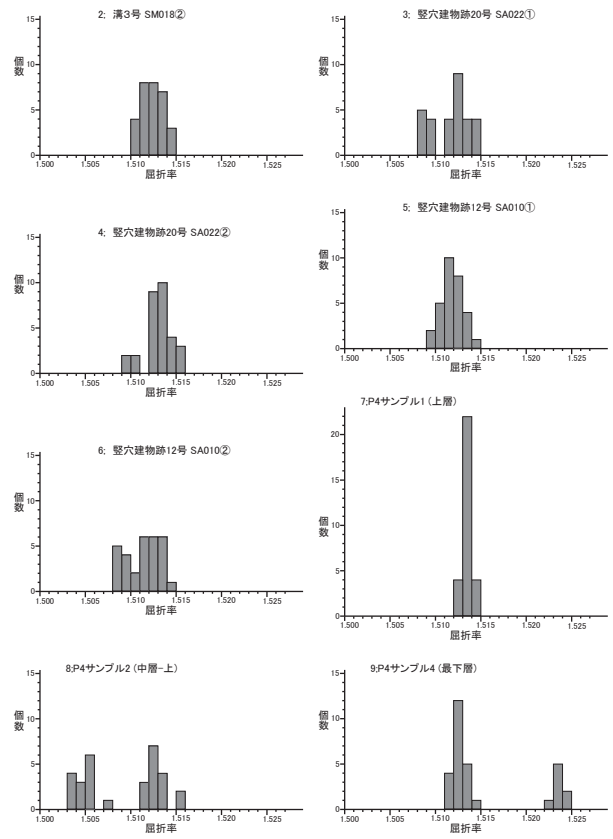


図2 火山ガラスの屈折率測定結果

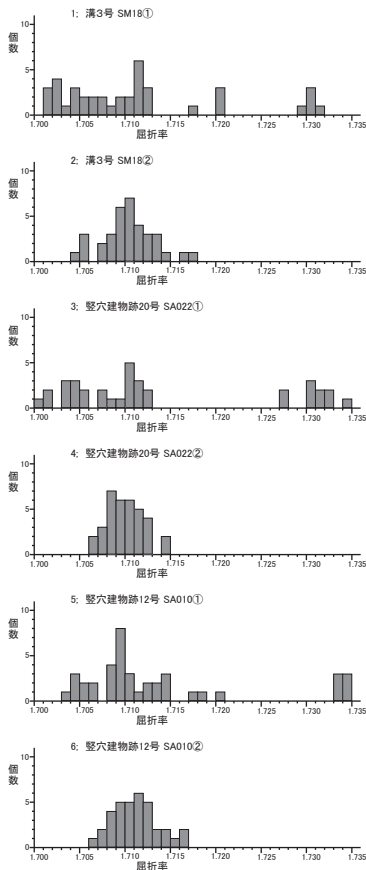


図3 斜方輝石の屈折率測定結果(1)

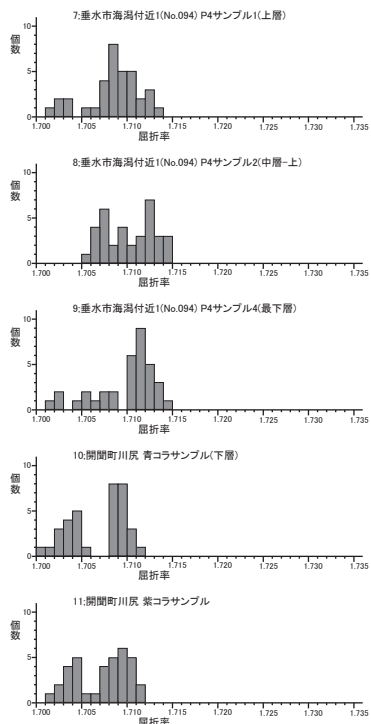


図4 斜方輝石の屈折率測定結果(2)

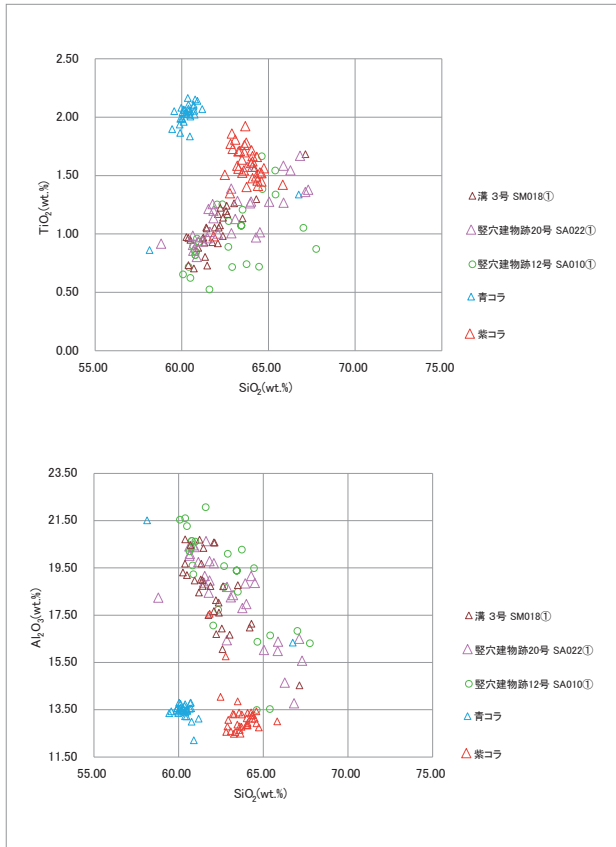


図5 スコリアの科学組成散布図(1)

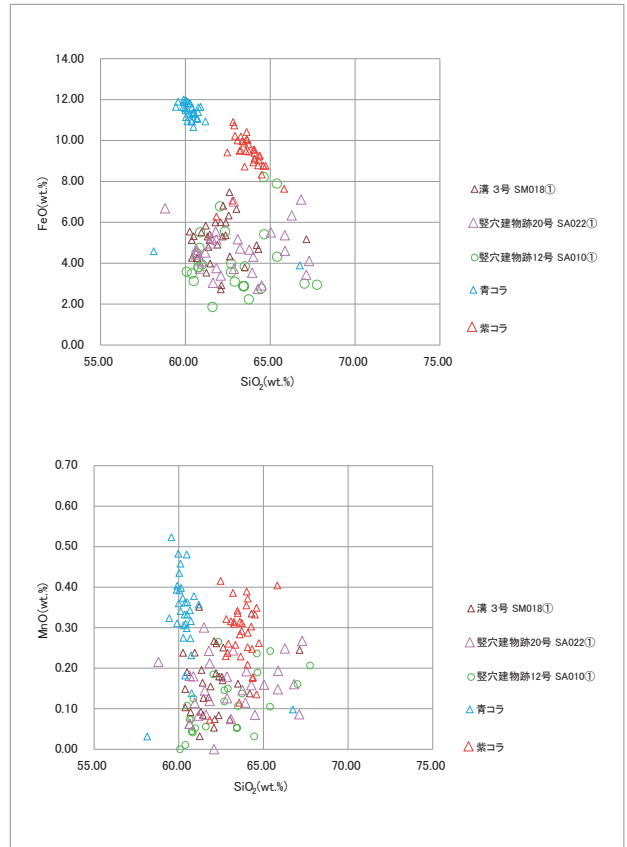


図6 スコリアの科学組成散布図(1)

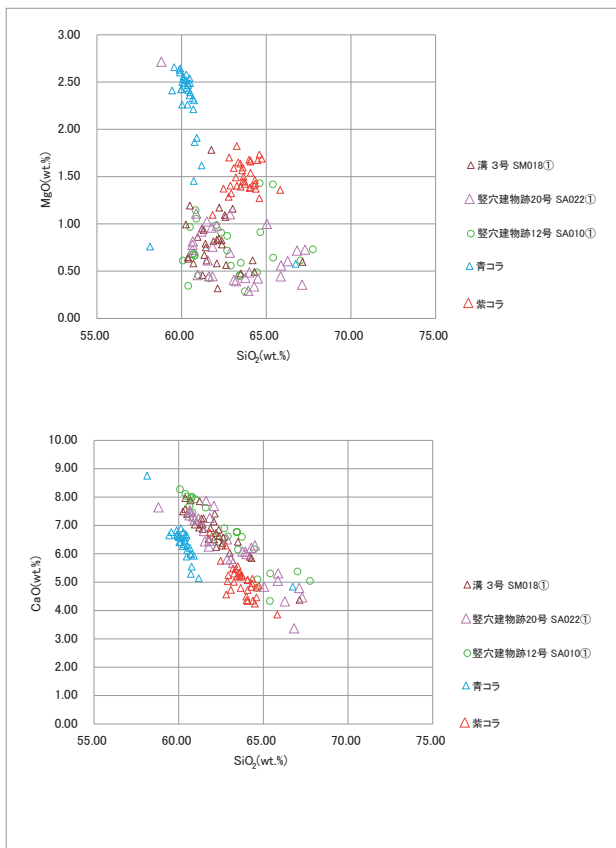


図7 スコリアの科学組成散布図(3)

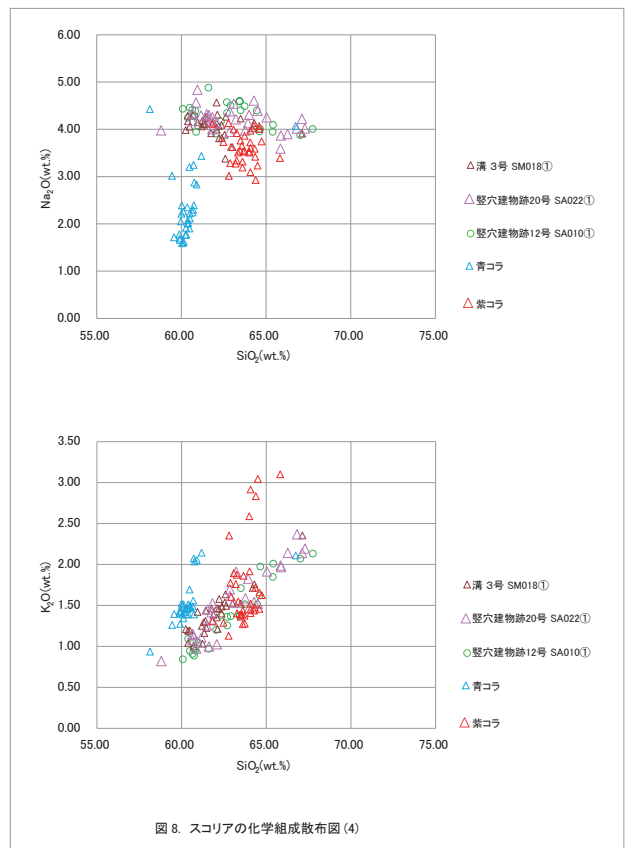


図8 スコリアの科学組成散布図(4)

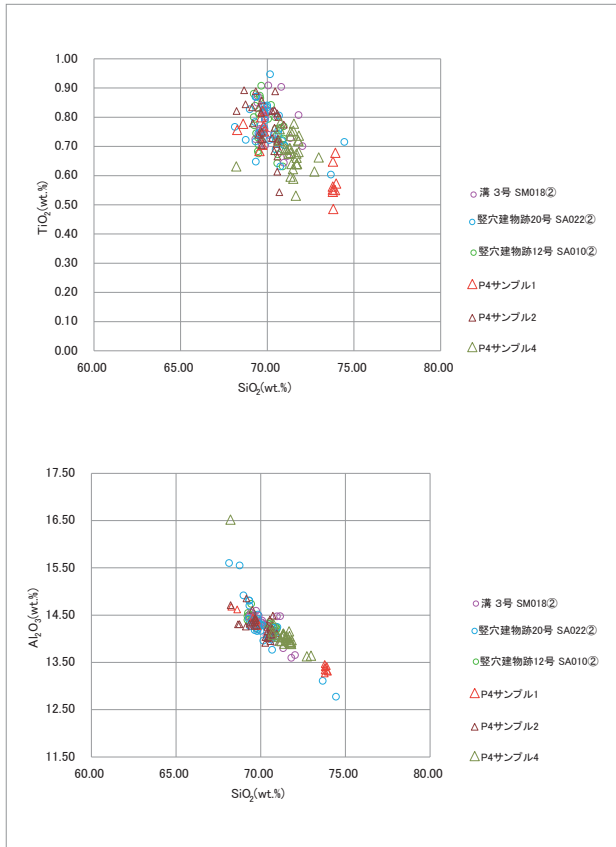


図9 軽石の科学組成散布図(1)

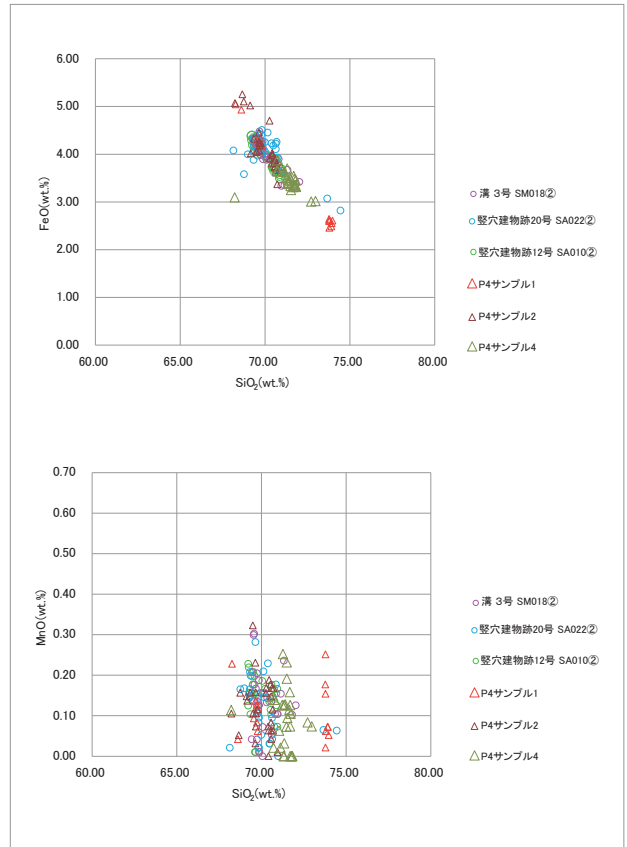


図10 軽石の科学組成散布図(2)

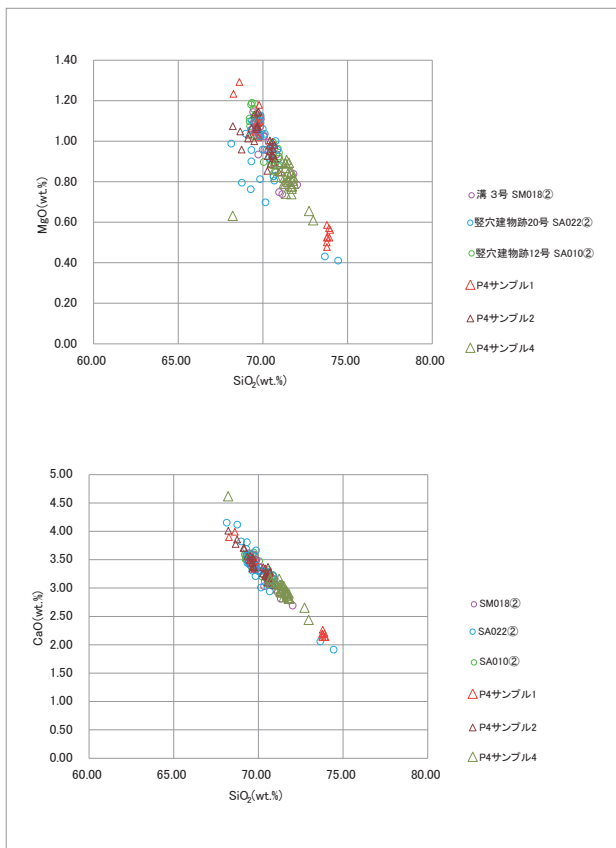


図11 軽石の科学組成散布図(3)

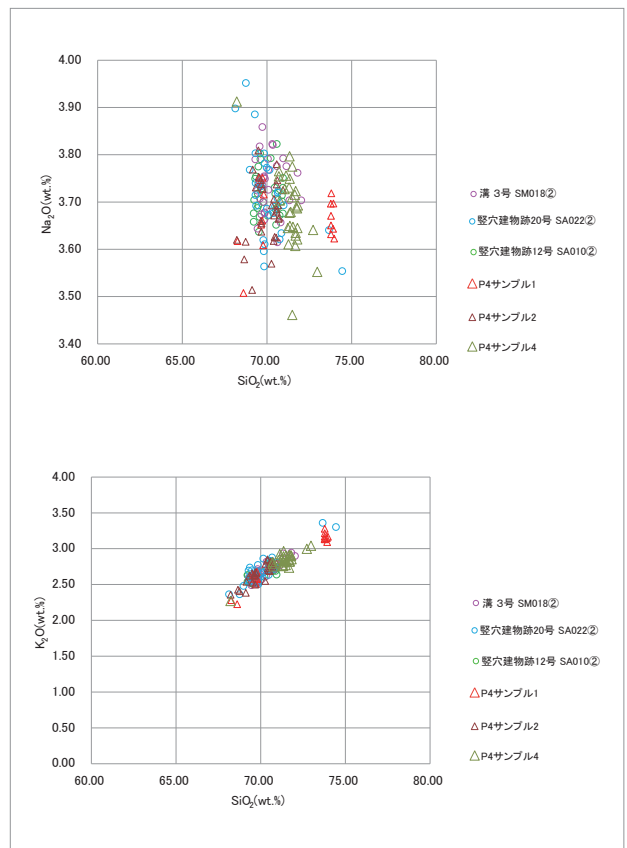
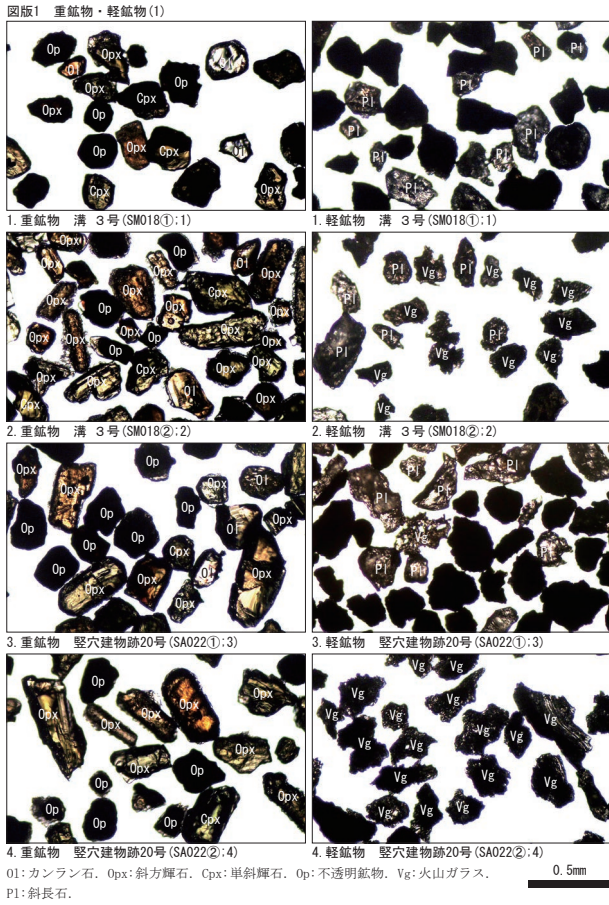
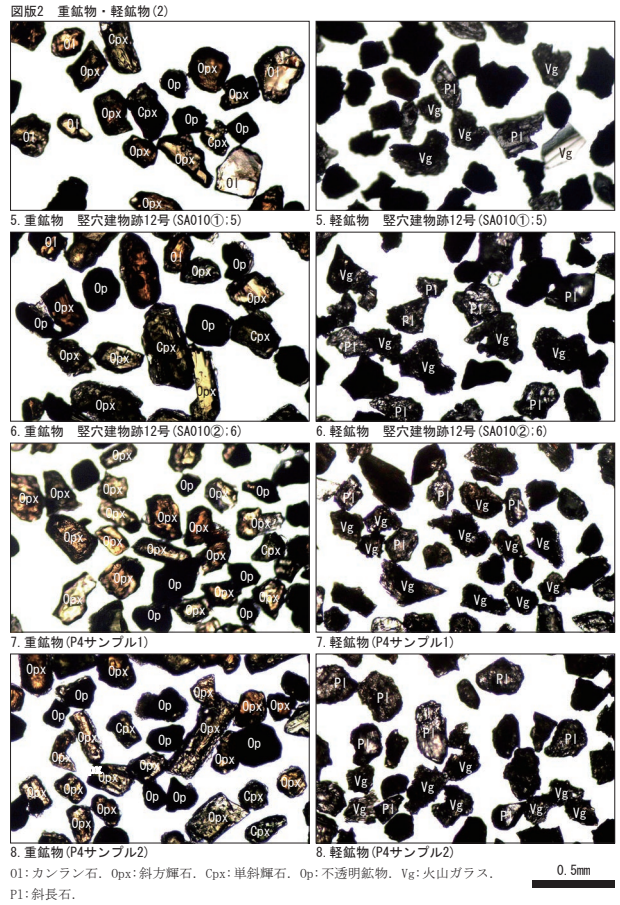


図12 軽石の科学組成散布図(4)

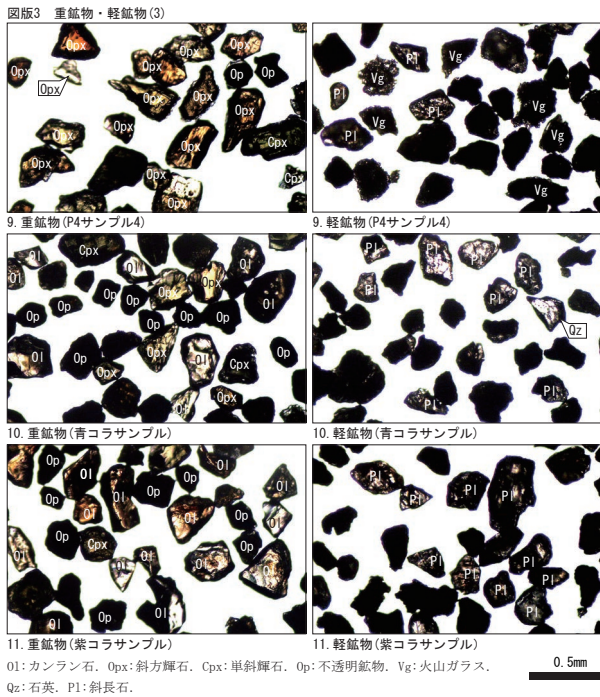
図版1 重鉱物・軽鉱物(1)



図版2 重鉱物・軽鉱物(2)



図版3 重鉱物・軽鉱物(3)



図版4 スコリア・軽石(1)



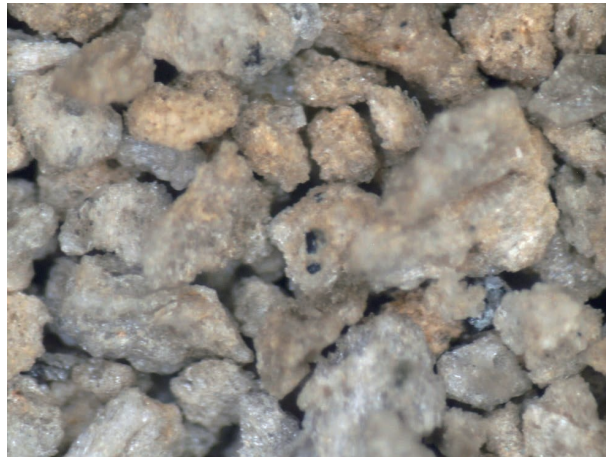
1.スコリア 溝 3号(SM018①;1)



2.軽石 溝 3号(SM018②;2)



3.スコリア 竪穴建物跡20号(SA022①;3)



4.軽石 竪穴建物跡20号(SA022②;4)



5.スコリアと軽石 竪穴建物跡12号(SA010①;5)



6.スコリアと軽石 竪穴建物跡12号(SA010②;6)

2.0mm 1.0mm
1, 3, 5 2, 4, 6

図版5 スコリア・軽石(2)



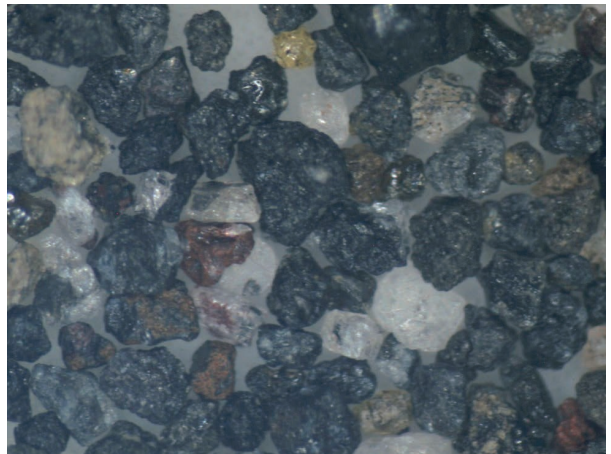
7.軽石(P4サンプル1)



8.軽石(P4サンプル2)



9.軽石(P4サンプル4)



10.スコリア(青コラサンプル)



11.スコリア(紫コラサンプル)

2.0mm 1.0mm
7-9, 11 10

第Ⅵ章 総括

本遺跡は縄文時代から近世の複合遺跡であるため、時代別に遺構・遺物の歴史的評価を整理し総括とする。

第1節 縄文時代中期から縄文時代後期

遺構は落とし穴が3基、土坑が2基検出された。落とし穴は平面が円形プランで、逆茂木は確認されていない。火山灰の堆積がなく、年代比定が難しいが、円形プランの落とし穴は、縄文時代後期に出現するとされ(宮田 2004)、霧島市上野原遺跡や鹿屋市町田堀遺跡に類例がある。また、落とし穴の掘り込み面は、縄文時代後期土器を包含するⅡc層付近と想定され、検出層位や比較事例から縄文時代後期の落とし穴と判断した。

3基の落とし穴は10～20mの範囲に集まっており、上野原遺跡のような列状配置ではない。菱田川に近い立地から、水場に集まる動物用の罟として構築されたと推測される。土坑1号は、浅いために落とし穴と認定しなかったが、形態や埋没状況から、掘削途中で放棄された落とし穴の可能性はある。

遺物は、春日式土器や丸尾式土器が出土した。また、五角形鏃もこの時期に該当すると考えられる。遺物の出土量は少なく、生活の痕跡を示す遺構は確認されなかった。周辺の地形は、養鰻場のある調査区南の谷に向かって緩やかに傾斜しており、これらの遺物は、標高の高い調査区北側から流入したものと考えられる。

このことから、縄文時代後期の遺跡周辺は、猟場として利用されている。

第2節 縄文時代晩期末から弥生時代中期

遺構は堅穴建物跡が1軒検出された。地形が削平されており、床面付近が残存していたと考えられる。山ノ口Ⅰ式土器が出土していることから、弥生時代中期中頃の遺構である。

大隅半島においては、弥生中期前半に鹿屋市西ノ丸遺跡や大崎町沢目遺跡などの拠点集落が平野部に出現し、本格的な水田稲作が開始される(川口 2017)。さらに、弥生中期中頃には、谷底平野における水田開発が始まり、各水系の中流域に遺跡が進出する。周辺遺跡の動向から判断すると、本遺跡は谷底平野の水田開発に伴って菱田川下流域の台地上に進出した小規模集落の一つであると想定される。

土器は末添式、刻目突帯文土器、入来Ⅰ・Ⅱ式、山ノ口Ⅰ・Ⅱ式、須玖式が出土した。また、包含層で出土した磨製石鏃は弥生中期に該当すると考えられる。

第3節 弥生時代終末期から古墳時代前期

遺構は堅穴建物跡10軒、土坑2基が検出された。堅穴建物跡は、炉跡や日用品としての土器、石器を伴うことから、堅穴住居跡と考えられる。以下、堅穴建物跡を堅穴住居跡と読み替えて報告する。

(1) 遺構の変遷

第37表、第151図は、第Ⅴ章第1節で示した土器編年と遺構の切り合いをもとに、堅穴住居跡の廃絶時期の変遷を示したものである。この中で、堅穴住居跡7、8、10号は、土器が少なく古墳時代初頭と前期前半の細分が難しい。7号と10号は、切り合い関係から古い7号を古墳時代初頭、新しい10号を古墳時代前期前半とした。堅穴住居跡8号については、時期を細分する根拠が弱いので、古墳時代初頭と前期前半の両方に示している。

遺構の存続期間は、規模や役割によって長短があり、廃絶時期だけで同時性を示すことはできないが、概ね集落跡の変遷を捉えることができると考えている。

① 堅穴住居跡の変遷

古墳時代終末期前半から後半は、堅穴住居跡2号、3号が各1軒みられる。両者の距離は約80m離れており、配置に規則性は認められない。

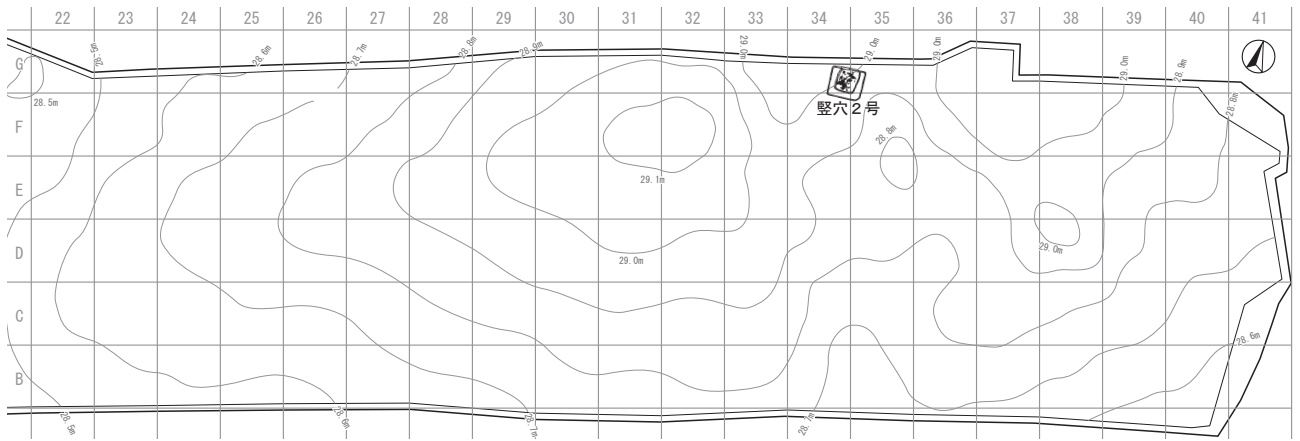
古墳時代初頭になると、建物の配置がA群とB群の2か所に分かれる。堅穴住居跡4号は大型の方形住居跡で、炉跡の近くに鉄器加工に関わる台石が置かれていた。工房的な性格をもつ可能性がある。

古墳時代前期前半は、集落跡の終焉期である。住居跡は軒数が増加し、古墳時代終末期に引き続き2か所に分かれて分布している。A群は大型の花弁型堅穴住居跡が2軒存在するが、B群は方形堅穴住居跡のみで構成されている。堅穴住居跡5号は直径10.4mで南九州最大の花弁型堅穴住居跡である。

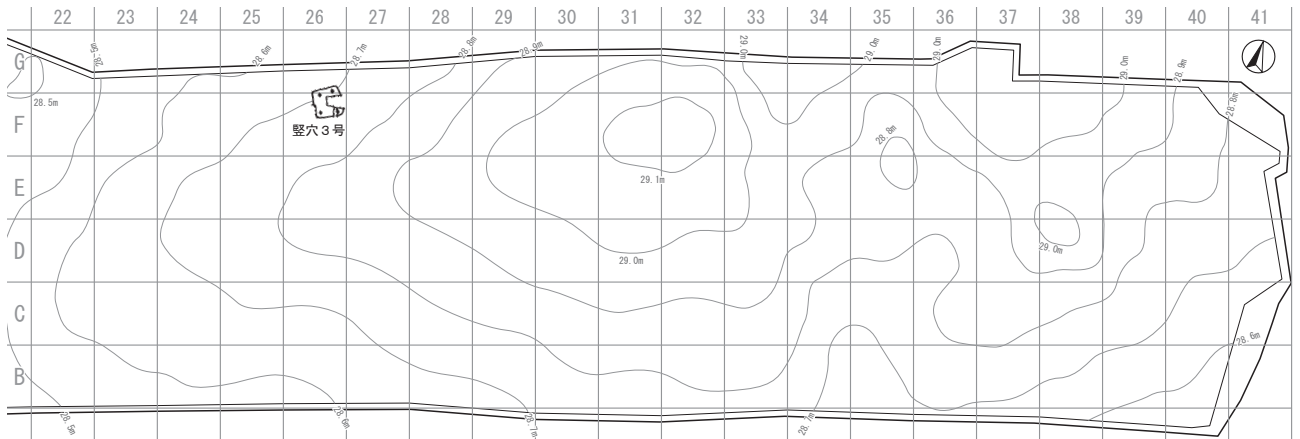
第37表 堅穴建物跡の廃絶時期一覧表

時期	堅穴建物跡	判断基準
弥生末前半	2号	甕、高坏から時期判断
弥生末後半	3号	高坏から時期判断
古墳初頭	A群：4号、8号 B群：7号	4号は高坏から時期判断 7号は10号(古墳時代前期前半)に切られているため古墳初頭と判断
古墳前期前半	A群：5号、6号、8号 B群：9号、10号	5号、6号は甕、高坏から時期判断 9号は浅鉢から時期判断 10号は7号を切っているため古墳時代前期前半と判断

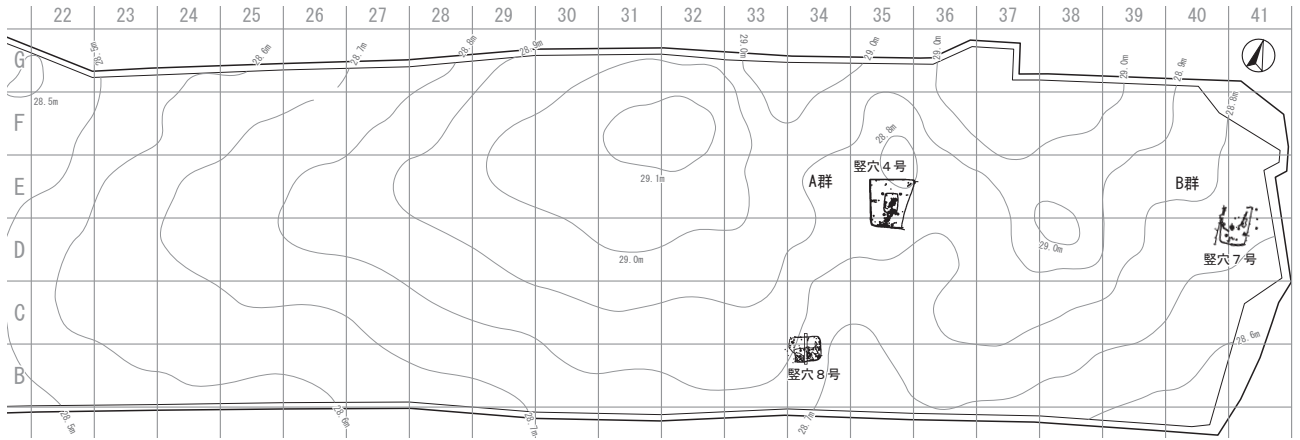
※ 8号は所属時期を特定できないため、両時期に入れている。



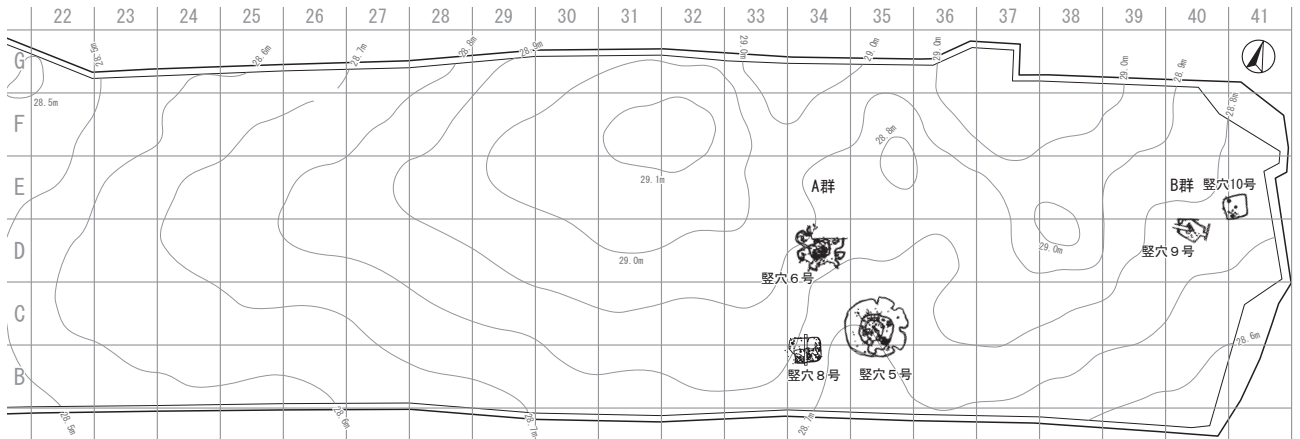
弥生時代終末期前半の遺構配置図



弥生時代終末期後半の遺構配置図



古墳時代初頭の遺構配置図



古墳時代前期前半の遺構配置図

第151図 竪穴住居跡変遷図

0 (1 : 1200) 50m

② 遺構の同時性と性格

竪穴住居跡の同時性について、竪穴住居跡の存続期間を踏まえて検討する。

竪穴住居跡の中で、建て替えが行われているのは、竪穴住居跡5号であり、このことは、花卉型竪穴住居跡の存続期間が小型方形竪穴住居跡より長い可能性を示している。仮に花卉型竪穴住居跡が、弥生時代終末期前半から存続していたとしても、同時併存していた建物数は以下の通りと推測される。

- 弥生時代終末期前半：1～2軒程度
- 弥生時代終末期後半：1～2軒程度
- 古墳時代初頭：A群 2～3軒程度
B群 1軒程度
- 古墳時代前期前半：A群 2～3軒程度
B群 2軒程度

本遺跡の竪穴住居跡は、古墳時代初頭に2つの住居群に分かれ、建物数が増加しているものの、概して小規模な集落跡である。出土している土器は、形式的連続性が強く、同一集団が弥生時代終末から古墳時代前期前半に継続して居住していたことが想定される。

南九州の集落跡は、竪穴住居跡が主体で、溝や空地で集落内が区画されず、同一集落内に大小複数の居住形態が混在することが指摘されている。このような特徴から、集落内で階層差や集団関係の複雑化が進行していない状況であるとされてきた（坪根 2003, 石田 2018）。これに対し、平面積が20㎡を超える4本主柱型の竪穴住居跡は、古墳時代前期に集落の有力者の家屋として導入されたという指摘もある（中間 1999）。

本集落跡は、古墳時代初頭以降、空地を挟んで2つの居住単位を確認できる。A群では、いずれも床面積が46㎡を超える大型竪穴住居跡が連続して建てられている。これらの大型住居跡では、廃屋儀礼に関わる多量の土器、鉄器が出土し、住居間で土器の接合関係が認められた。また、5号は主柱穴の建替えが行われており、4号は鉄器生産に関する工房的な性格をもつ可能性がある。

大型竪穴住居跡と小型方形竪穴住居跡には、規模や存続期間、出土遺物等に優劣がみられ、大型住居は有力者等の家屋の可能性もある。従って、大型住居が存在するA群と存在しないB群の間には、何らかの階層差や性格差が存在する可能性を指摘しておきたい。

これまでの集落遺跡の分析は、年代幅の広い土器編年を用いており、遺構の同時性に課題があった。本遺跡の調査成果は、社会構造や集落構造を知る上で重要であり、今後は、土器編年の精緻化を進めながら、集落構造の解明を進めていく必要がある。

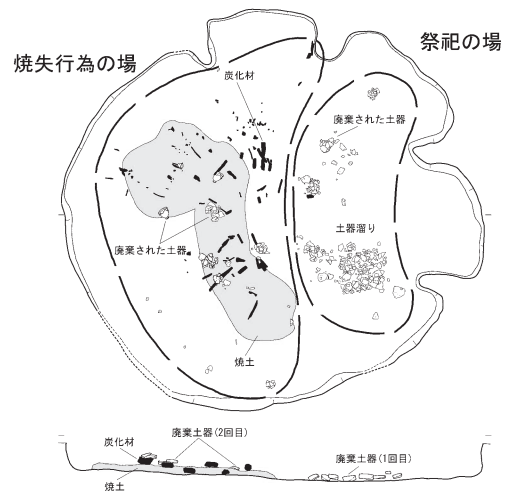
生業については、竪穴建物跡5号、8号の焼土跡からイネの炭化種実が確認され、付近で水田稲作を行っていた可能性がある。

(2) 焼失住居跡について

本遺跡では7軒の竪穴住居跡で炭化材や焼土跡を検出した。これらの遺構は、焼失建物認定基準A～B類（岡村編 2008）に該当するため、焼失竪穴住居跡と判断した。時期別の内訳は弥生時代終末期1軒（3号）、古墳時代初頭～前期前半6軒（4～9号）である。近隣の事例では、志布志市長田遺跡、鹿屋市荒園遺跡で古墳時代中後期の検出例があるが、古墳時代前期で多数確認された事例は本遺跡が初見となる。これらの焼失竪穴住居跡の特徴をまとめると以下の通りとなる。

- 1 炭化材・焼土跡は住居跡の一部に残存しており、全体が焼け落ちた状態ではない。一部は上部構造を示すように残存している。
- 2 炭化物・焼土跡と遺物溜り等の分布は重複していない。遺物溜りには、祭祀に使用したと考えられる遺物が含まれており、焼却行為と祭祀行為を行う場が分かれている（第152図）。土器は床面直上と炭化物上面で出土しており、2回に分けて廃棄された可能性がある。
- 3 炭化材の計測を行い出土建築部材の事例（奈良文化財研究所 2010）と比較を行った。本遺跡の炭化材は、計測値から垂木や板材が中心であると推測される。カシヤクリを使用しておらず、柱や梁など大型建築部材の可能性は低い。

以上の特徴から焼失原因を考察すると、住居移転の際に建築材の焼却と土器を用いた祭祀が行われたと考えられる。各竪穴住居では、祭祀用に製作された特殊土器（109, 113, 114, 269）や磨製石器（231）、軽石製品（282）が確認され、入念な準備の元に廃屋儀礼が行



第152図 焼失住居跡模式図

われている。また、煮炊きを使用した大甕や多量の甕形土器、高坏が破碎・廃棄されており、飲食儀礼が行われた可能性がある。

古墳時代前期の焼失住居跡は、川南町湯牟田遺跡で11軒、同町尾花A遺跡で91軒、宮崎市城平遺跡で4軒、都城市坂元B遺跡で2軒発見されており宮崎県に事例が多い。これらの遺跡では、建物の焼却処分と土器廃棄を伴う祭祀行為が行われ、特に坂元B遺跡は焼却後に土器を廃棄しており、本遺跡の状況と類似している。

また、湯牟田遺跡や川南町尾花遺跡ではプラントオパール分析が行われ、住居の屋根や壁材にススキ属が使用されたことが想定されている。本遺跡では、プラントオパールや微粒炭は検出されておらず（第V章第3節）、ススキ属等を建築材のみ焼却したのと考えられる。

本遺跡は、住居廃絶に関わる廃屋儀礼を知る上で重要である。また、焼失住居跡や土器は、宮崎平野及び都城盆地と強い関連性があり、古墳時代開始期に両地域から強い影響を受けている。

(3) 出土遺物について

出土遺物の中で、特に特徴的であったのが、鉄分の付着した砥石が多く出土したことである。これらの砥石は、鉄器の研磨用と考えられ、鉄製利器が普及している状況を窺うことができる。特に竪穴住居跡4号では、中央炉に隣接して焼けた台石が出土した。台石には、鉄分と敲打痕、砥面がみられ、鉄器製作の金床石に利用された可能性がある。

炉は鉄滓が出土していないため、鍛冶炉とは認定していないが、羽口を使用しない低温操業の場合は、鉄

滓が排出されない可能性もある。南九州では、弥生時代終末期以降、鍛冶関連遺物が確認されるため、鍛冶具が出土した場合は、炉内周辺の埋土を水洗し微細な鍛冶関連遺物を確認する作業が必要である。

この他に、棒状の磨敲石と、その素材と考えられる礫が多数出土した。焼けているものがあるが、使用痕が弱く、鍛冶具と断定できる石器はなかった。

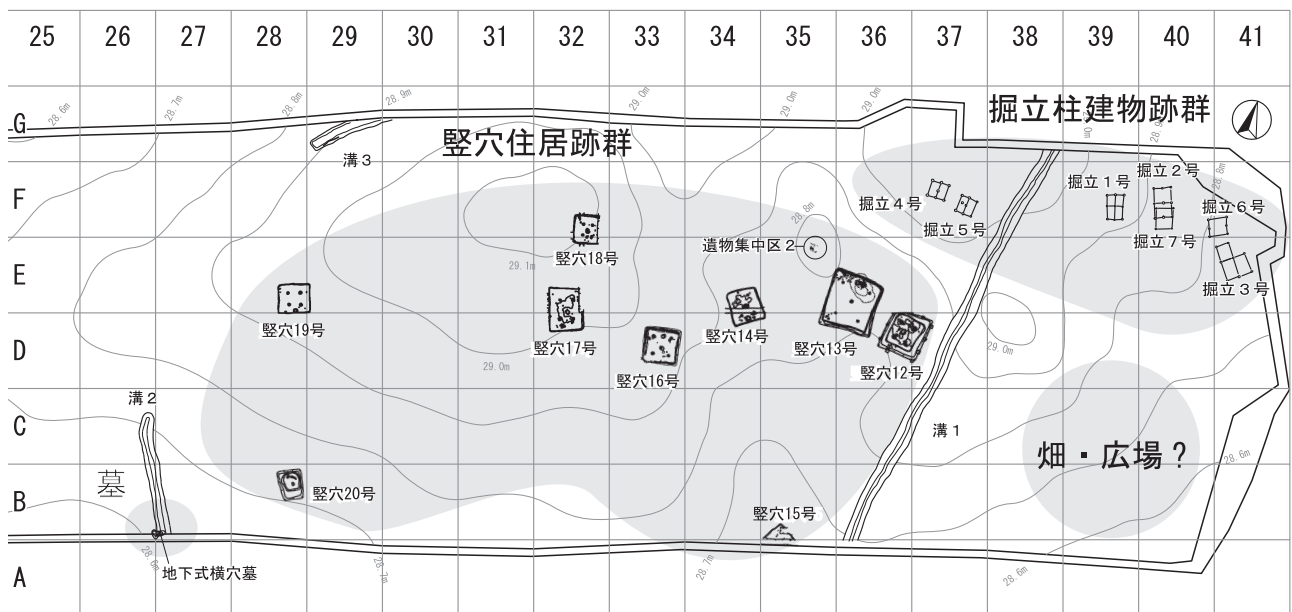
第4節 古墳時代終末期

1 集落構造について

遺構は竪穴建物跡9軒、掘立柱建物跡7棟、溝3条、地下式横穴墓1基が確認された。竪穴建物跡は、竪穴住居跡の可能性が高いため、以下読み替えて記述する。

調査区は、遺構配置から7世紀中頃～後半の集落跡中心部に相当すると考えられる。大きな特徴としては、竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群が溝によって区画されていることである（第153図）。一連の遺構である溝跡1～3号は、その性格として集落を囲む外溝、若しくは内部を区画する内溝と考えられる。溝跡は西側が浅く途切れており、集落の入口の可能性もある。溝跡2号では地下式横穴墓が壁面を掘り込んで構築されていた。類例は志布志市安良遺跡にあり、集落跡に伴う墓である。

遺構は、竪穴住居跡群が溝の西側、掘立柱建物跡群が溝の東側を中心に配置されている。掘立柱建物跡群南の空白地は、畑や広場の可能性が想定されるが、包含層が削平されており確認できなかった。検出された遺構は竪穴住居跡13・17号を除いて、西暦764年のP4火山灰と西暦874年の紫コラが堆積している（第V



第153図 古墳時代終末期の集落跡（7世紀中頃～後半）

章第2節)。火山灰の堆積している遺構は、出土遺物に大きな時間差がない。また、大型の溝を掘削する理由や労働力を考慮すると数軒単位の小規模集落とは考えにくく、遺構はほぼ同時併存していたと考えられる。

遺構配置から集落の構造を検討すると以下の2つが考えられる。

- 1 居住域である竪穴住居跡群と倉庫域の掘立柱建物跡群が溝によって区画されている。この場合、倉庫群は集落全体の共有物であり集団間の階層差は顕著ではない。
- 2 竪穴住居跡群を居住域とする集団と掘立柱建物跡群を居住域とする集団が溝によって区画されている。

掘立柱建物跡群は長方形プランで面積の大きい1～3号が居住用、方形プランで面積の小さい6、7号が倉庫と考えられる。また、竪穴住居跡群に伴う倉庫は溝跡西側の掘立柱建物跡4、5号となる。

一般的には掘立柱建物跡に住む集団が上位集団と考えられ、集落内部に階層差が存在することになる。

溝跡1号の遺物出土状況を見ると、遺物が東西両側から廃棄されており、掘立柱建物跡群には居住用の建物跡が含まれている可能性がある。よって、上記2の可能性が高いとみられるが、今後周辺遺跡の調査状況を踏まえて検討していく必要がある。

大型の溝を伴う古墳時代の集落遺跡は、志布志市安良遺跡、大崎町荒園遺跡、鹿屋市中尾遺跡があるが、集落跡の全容が把握できた事例は本遺跡が初めてである。また、宮崎県では高鍋町下耳切遺跡、国富町西下

本庄遺跡、宮崎市宮ヶ迫・古城第2遺跡に類例があり、6世紀後半以降に出現する。大分県では、大型溝を伴う溝跡は確認されていないことから¹⁾、大型溝を伴う集落跡は、6世紀後半以降に南九州内部で出現するとみられる。

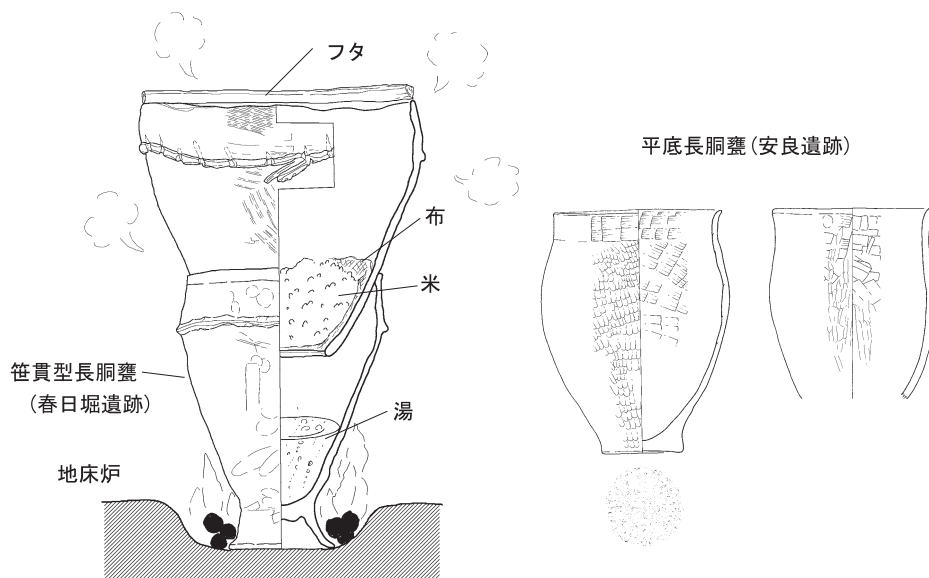
志布志湾沿岸域の集落遺跡では、6世紀後半以降に鉄鏃の出土が増加する。大型溝出現の背景には何らかの社会的緊張が存在した可能性も想定され、本集落跡は、古墳時代終末期の集落構造や南九州の社会情勢を知る上で重要である。

2 出土遺物について

出土遺物の大半は笹貫式新段階と呼ばれる在地土器様式で、現在の編年では6世紀後半～8世紀に位置付けられている(中村直 2009, 相美 2014)。須恵器は出土量が少なく、供膳具である高坏、坏、蓋が中心で、貯蔵具の出土量は少ない。本遺跡の食器組成は、笹貫式新段階の土器様式に外来の供膳具(須恵器、精製坏)や甑を取り入れたものである。

甑の使用に当たっては、竈や丸底の長胴甑を必要とするが、本遺跡では確認されていない。本遺跡や志布志湾沿岸域で出土している甑を観察すると、器面の使用痕から口径19cm前後の甑形土器に載せて使用している。竪穴住居跡16号では、甑(372)と小型甑形土器(369)、地床炉が検出されており、これから使用法を復元すると第154図のようになる。甑は、形態や胎土から都城・えびの盆地方面からの搬入品と考えられるが²⁾、竈の代わりに地床炉で使用していることが特徴である。

本遺跡の場合は、笹貫式土器の小型甑形土器に丸底長胴甑の機能を持たせており、この甑形土器を笹貫型



第154図 志布志湾沿岸域における甑の使用想定図

長胴甕と仮称しておきたい。ちなみに、菱田川以北の安良遺跡では、宮崎平野の長胴甕に平底をつけた平底長胴甕が、同じ使用方法で用いられている。

このような甕形土器が志布志湾沿岸域で出現する理由は、米の生産量が少ないために竈を設置する必要がないことや、伝統的な調理方法への固執などが考えられる。

須恵器は、九州全体の地域性からみて豊前・豊後地域の須恵器組成に類似するため、豊前編年（長 2012）を用いて遺構年代を特定した。溝跡 1 号、竪穴住居跡 12 号の須恵器坏 G 蓋、坏 G、小型高坏 C II 類は、豊前 V - II 期に相当し、年代は 7 世紀第 3 四半期を中心とする。また包含層や他の遺構の須恵器も 7 世紀後半頃の特徴を示すものが多い。

また、搬入品と考える精製坏は、下耳切遺跡の坏 D に相当し、7 世紀中頃に位置付けられており（今塩屋 2006）、共伴した粗製坏は、精製坏をモデルとして在地で製作されたと考えられる。土器付着炭化物（446, 455）及び竪穴住居跡 16 号出土炭化種実の放射性炭素年代は、7 世紀中頃～後半である。本遺跡は 7 世紀中頃～後半の集落遺跡で、存続期間は須恵器一型式の年代幅であると推察される。

最後に、須恵器の産地について触れておきたい。本遺跡の小型高坏 C II 類（432, 443）は愛媛県や香川県、岡山県の須恵器窯で生産され豊前の京都平野を中心に濃密な分布がみられる（長 2012）。いまのところ瀬戸内海沿岸部を中心に生産されたものが、海路で輸入されたことが想定され、九州西北部よりも豊前や瀬戸内沿岸部との関連性が強い。

菱田川を隔てた志布志市上苑遺跡では八女産の高坏が出土している³。また、上苑遺跡や安良遺跡では、貯蔵具の出土量が多い。両遺跡は、6 世紀後半～8 世紀まで続く拠点的な集落遺跡である。須恵器の産地や搬入量が遺跡の性格や菱田川の南北地域で異なっており、流通や地域間交流の複雑さを窺うことができる。

第 5 節 古代

掘立柱建物跡 7 棟、ピット列 1 条、焼土跡 1 基が検出された。掘立柱建物跡とピット列は、南北方向もしくは東西方向に主軸をもつ。総柱の掘立柱建物跡は 8～11 号、側柱の掘立柱建物跡は、12～14 号である。

崖側に集中して立地していることから、生活基盤が、菱田川やシラス台地下の湧水と密接に関わっていると考えられる。また、掘立柱建物跡は、台地の小高い場所に立地し、掘立柱建物跡 8～10 号、14 号では、土師器や須恵器が出土している。

集落遺跡の性格については、身屋のみで庇が備わら

ない建物（無庇建物）のみであったことから、階層的には、一般的な集落跡に該当する（川口 2018）。ただし、建物の方位が磁北を向き、総柱建物を伴うなど、通常的一般集落には見られない点があり、この地域においては、有力農民層の集落である可能性を持つ。土師器の年代から判別すると、存続年代が半世紀程度の集落と考えられるので、複数の掘立柱建物跡が建て替えを繰り返しながら存在したと推測される。

塊・坏は、平底か充実高台である。体部は緩やかに内弯しつつ、直線的に開いている。甕は胴部が張らず直線的で、器壁は薄い傾向がある。以上の特徴から、この遺跡の出土遺物は、9 世紀後半から 10 世紀中頃と考える。高篠遺跡編年によると III～IV 期の過渡期に、志布志湾岸地域の編年では、古代 III～IV 期の過渡期に相当すると考えられる（松田 2004, 横手 2019）。近隣の遺跡では、大崎町天神段遺跡に類例がある。

なお、焼土 1 からは、土師器の他に、軽石製製品が多数出土した、その中でも、人為的に穿孔を施した軽石製品が見つかった。他の遺跡でも出土例があるが、利用目的が不明であることから、今後の調査・研究の報告を注視したい。

第 6 節 中世

中世前期の遺構としては土坑墓 1 基、中世後期は堀跡 1 条、道跡 1 条、ピット列 1 基がある。竪穴建物跡は出土遺物がなく、詳細な時期判断は困難である。以下、各時期に分けて調査成果を報告する。

（1）中世前期

中世前期に該当する遺構としては、土坑墓 1 基がある。土坑墓は破碎した土鍋を 4 箇所分割して副葬しており、土器付着物の放射性炭素年代から 10 世紀後半から 11 世紀前半頃と考えられる。同時期の遺構・遺物が確認されていないことから、単体で存在している可能性が高い。

志布志湾沿岸域では、11 世紀～12 世紀前半に塚墓と土坑墓が出現し、副葬品に土師器を用いている。また、集落遺跡に伴う事例は確認されていない（上床 2019）。本遺跡の土坑墓は、上記の特徴を備えており、大隅半島における中世土坑墓の初現期に位置づけることができる。

（2）中世後期

① 遺構の概要・性格

堀跡 1 条、道跡 1 条、ピット列 1 基がある。これら 3 つの遺構は、埋土や配置から同時期であると判断した。堀跡は防御用の薬研堀で、台地の端に並行して構築されている。埋土の状況から堀の東側（崖側）に、掘削土を利用して土塁を築いていた可能性が高い。中世後

期の遺物は出土しなかったが、志布志新城跡や霧島市桑幡氏館跡、留守氏館跡の事例から中世後期に構築されたと考えられる⁴。

道跡は堀跡に分断されており、一部崩落しているものの、崖下まで到達している痕跡を確認できた。連絡用通路の可能性があり、堀で分断することによって、人の移動を制限したとみられる。道跡と堀が交わる地点には、小ピットが検出され、板橋等の存在が想定された。

堀跡の性格については、調査区の南に天守城跡が位置することから、①天守城跡の一部を担う防御施設、②天守城跡を攻略するための施設、の2案が指摘された。堀跡は崖側に土塁を構築し、菱田川対岸の敵対勢力を意識した構造となっている。また、天守城跡に関する聞き取り調査では、90歳代男性から「戦前まで天守城跡から春日堀遺跡に向かって外堀が残っていた。外堀は、現在農道になっている」との証言を得ることができた。

堀跡の構造や聞き取り調査から、本遺構は天守城跡に関連する防御施設の一部であると判断した。ちなみに、明治35年の地図には、春日堀遺跡の眼下を菱田川が流れており、現在も水田の区画から旧河道を確認できる(第155図)。中世においても同じ流路とは限らないが、防衛や流通に川を利用できる環境が山城の選地に影響を及ぼしたことも考えられる。

② 堀跡の歴史的評価

周辺遺跡や立地、文献に記された争乱等を踏まえ、堀跡の歴史的評価について検討する。

菱田川は志布志湾岸北岸域で最も大きい河川でその右岸には蓬原城跡、金丸城跡、片平城跡、天守城跡が構築された。天守城跡は、楡井頼仲が志布志城を攻略する際の砦で、その周辺で合戦が行われたとの伝承が残っている(大崎町1951, 1988)。菱田川右岸の山城は、後方の備えに乏しい構造や伝承から、志布志城の敵対勢力に対して構築されたことを推測できる。

文献を確認すると、中世後期に菱田川を挟んで志布志城と対峙した勢力は、14世紀代に胡麻ヶ崎城から志布志城の畠山氏を攻めた楡井氏、16世紀前半に高山城から志布志城の新納氏を攻めた肝付氏、16世紀後半に高山城から志布志城を攻めた肝付氏・島津氏が候補として存在する(第38表)。天守城跡の一部と考える堀跡は、有力武家である楡井氏、肝付氏、島津氏のいずれかが、志布志城攻略と菱田川右岸の防衛を目的として構築したものと推察される。

中世山城の調査・研究は、肝付町高山城跡や志布志城跡のように有力武家の本拠地となった大規模山城を中心に行われてきた。今回の調査成果は、これまで不明であった小規模山城の構造や性格を明らかにできた

点が重要である。また、菱田川下流域には中世の遺跡が集中しており、この地域が防衛、経済の要衝地であったことを示している。

第7節 近世

溝跡11条、道跡5条を検出した。包含層が削平され、出土遺物がなく、年代を特定することができなかったが、埋土の状況から近世と判断した。溝跡は、南北方向と東西方向に伸びているが現在の地割とは異なっている。

類例は、鹿屋市小牧遺跡(18世紀代)や、志布志市見返り遺跡(年代不詳)にある。溝跡は周辺遺跡の事例から、近世の耕地開発に伴う区画溝の可能性を指摘しておきたい。

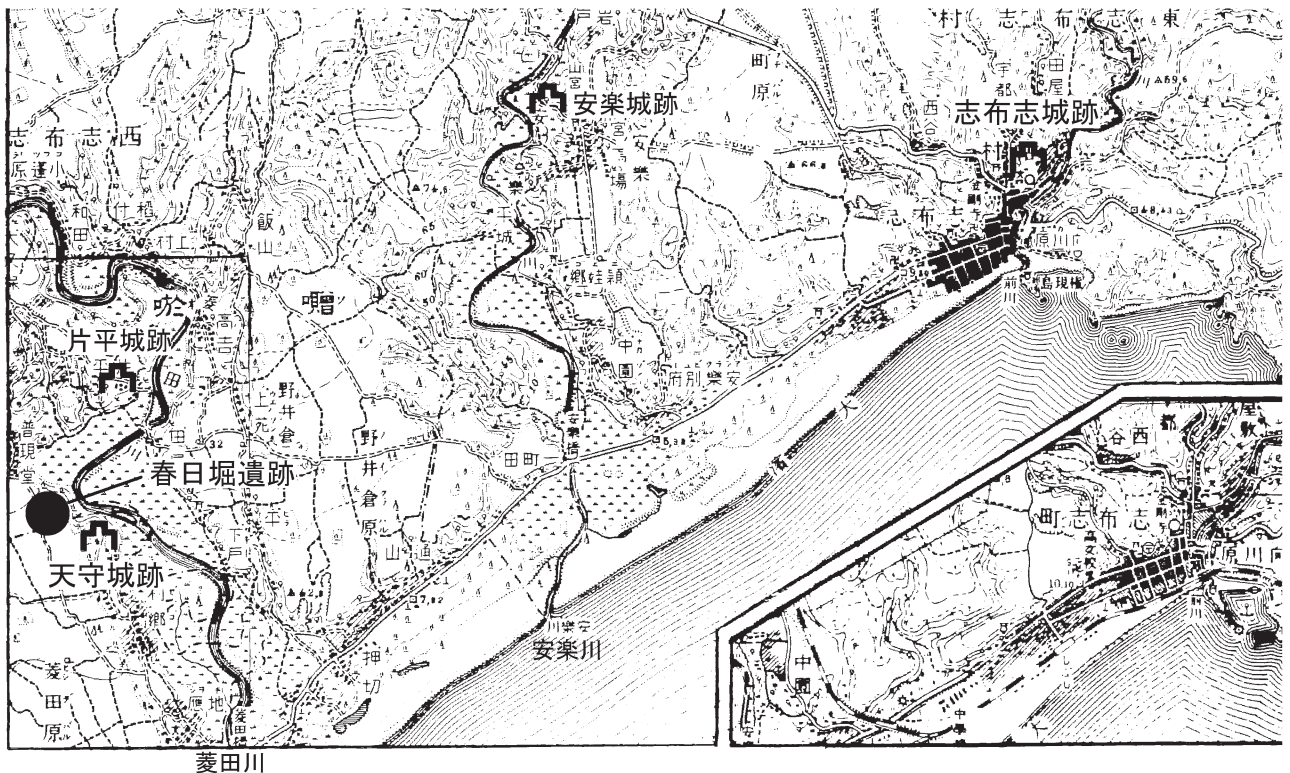
参考文献(発掘調査報告書は割愛)

- 石田智子 2018「弥生・古墳時代移行期における薩摩・大隅半島の集落と墳墓の形態」『集落と古墳の動態Ⅰ—弥生時代終末期～古墳時代前期—』第21回九州前方後円墳研究会事務局
- 今塩屋毅行 2006「第Ⅷ章 第2節 古墳時代集落の検討」『下耳切第3遺跡』宮崎県立埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書125
- 上床真 2019「志布志湾岸地域における中世墓の再検討—中世前期を中心として—」『中山清美と奄美学—中山清美氏追悼論集—』奄美考古学会
- 大崎町 1951『大崎町史』
- 大崎町教育委員会 1988『中世の城跡』大崎町文化財研究誌第6集
- 岡村道雄編 2008『日本各地・各時代の焼失堅穴建物跡—北海道・岩手県・宮城県・栃木県・石川県・愛知県・広島県・鹿児島県—』奈良文化財研究所
- 川口雅之 2017「弥生時代における大隅半島の農耕文化について」『鹿児島考古』第47号
- 川口雅之 2018「古代の薩摩・大隅国、多福嶋における律令制度の普及—考古学の調査成果から—」『縄文の森から』第10号鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 霧島市教育委員会 2013『大隅正八幡宮宮内遺跡—総括報告書—』霧島市埋蔵文化財発掘調査報告書18
- 相美伊久雄 2014「南九州東端域における7～8世紀の土器様相—志布志湾北岸域の甕形土器を中心に—」『Archaeology from the south』Ⅱ 新田栄治先生退職記念論集
- 長直信 2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産—7世紀を中心に—」『古文化談叢』67
- 坪根伸也 2003「南九州の集落と土器の様相」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究大会事務局
- 中摩浩太郎 1999「南部九州古墳時代の堅穴住居類型の変異に関する一考察」『人類史研究会』第11号
- 中村和美 1997「鹿児島県における古代の在出土器」『鹿児島考古』

第 38 表 中世における春日堀遺跡周辺の争乱

概要	年代	経緯
南北朝の争乱に関する争い	1336 年	志布志に榎井頼理（にれいよりまさ）が登場。志布志城（松尾城）を拠点として大隅に勢力を拡大。
	1336 年	足利尊氏が、南九州の南朝方勢力を制圧するために畠山直顕（はたけやまただあき）を日向国大将として赴任。直顕は 1338 年に南朝方の伊東氏と野辺氏、1339 年に肝付氏を従えた功績により 1345 年に日向守護職に任命される。以後、大隅への勢力拡大を開始。
	1351 年	畠山直顕が志布志城（松尾城）の榎井頼仲を攻める。頼仲は肝付氏を頼って高山に逃れる。
	1357 年	榎井頼仲は大崎の胡麻ヶ崎城を本城とし志布志城の奪還を三度試みるが、畠山直顕、祢寝氏らによって胡麻ヶ崎城を攻められる。頼仲は志布志城に逃れ自害。
島津家の後継問題に関する争い	1535 年頃	薩州島津家の後継問題が原因で、薩州家島津実久（しまづさねひさ）と伊作家島津忠良（しまづただよし）・貴久（たかひさ）親子の間で内紛が起きる。飢肥の豊州家島津直朝（しまづただとも）は、実久の側について参戦。志布志城の新納忠茂（にいらただしげ）は実久の誘いに応じなかった。
	1536 年	島津直朝は都城の北郷氏、高山の肝付氏らとともに、志布志城の新納忠茂を三方から攻める。
	1538 年	新納忠茂が降伏。志布志城を島津直朝に明け渡す。
肝付氏と島津家の領土争い	1538 年以降	高山城を本城とする肝付氏は、志布志の豊州家島津氏や都城の北郷氏と大隅・日向の領土をめぐる対立
	1562 年	肝付兼統（きもつきかねつぐ）は日向の伊東氏と協調し、志布志城の豊州家島津忠親（しまづただちか）を攻め、降伏させる。兼統は志布志を隠居所とする。
	1566 年	肝付氏と敵対していた薩州家島津貴久が、肝付家の本城である高山城を落城させる。以後、肝付氏は志布志城を本城とする。
	1574 年	志布志城を本城とする肝付兼亮（きもつきかねあき）が、島津貴久に降伏し志布志城を明け渡す。

※志布志市埋蔵文化財センター 志布志城跡リーフレットより作成



第 155 図 明治 35 年の古地図と春日堀遺跡 (1 : 50,000)

第 31 号 鹿児島考古学会

中村直子 2009 「7・8 世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集（中巻）』南九州縄文研究会

奈良文化財研究所 2010 『出土建築部材における調査方法についての研究報告』奈良文化財研究所

松田朝由 2004 「土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 71

宮田栄二 2004 「鹿児島県の落とし穴遺構について」『九州における縄文時代の落とし穴遺構第 14 回九州縄文研究会鹿児島県国

分大会資料』

横手伸太郎 2019 「土師器から見た古代～中世の大隅 - 8 ~ 13 世紀を中心に - 『鹿児島考古』第 49 号

注

- 1 大分市教育委員会長直信氏御教示
- 2 宮崎県教育委員会今塩屋毅行氏、西都市教育委員会津曲大祐氏御教示。
- 3 志布志市教育委員会相美伊久雄氏御教示。
- 4 鹿児島国際大学短期大学部三木靖名誉教授御教示。

圖 版



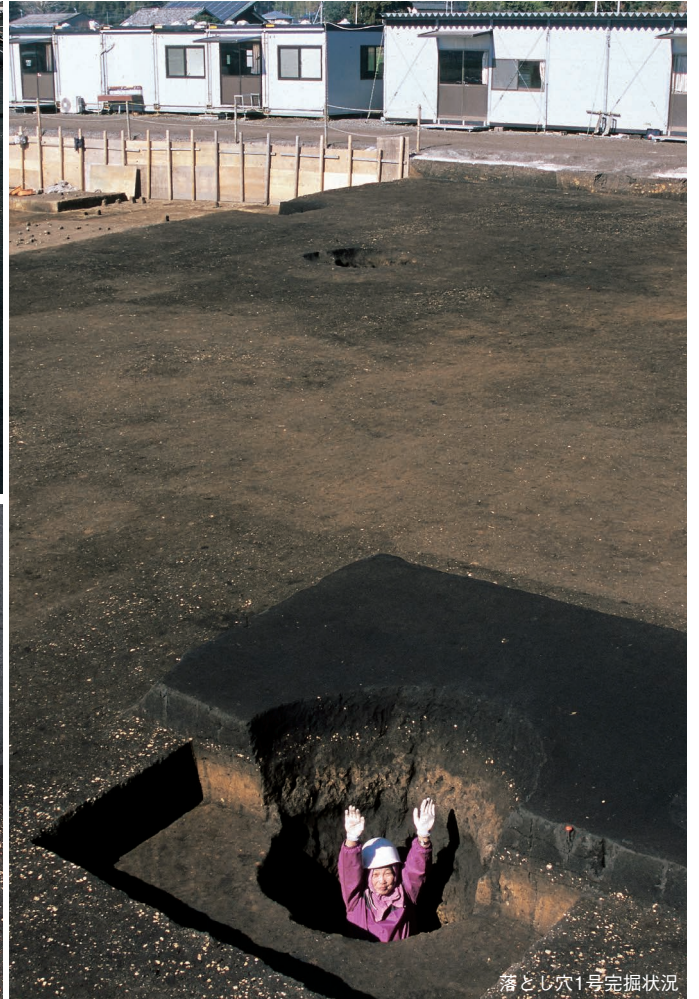
調査区航空写真（西から）

図版2





落とし穴1号検出状況



落とし穴1号完掘状況



落とし穴1号断面



落とし穴2号検出状況



落とし穴2号断面



落とし穴2号完掘状況



落とし穴3号半截状況

图版 4







竪穴建物跡3号炭化材検出状況



竪穴建物跡3号床面遺物出土状況



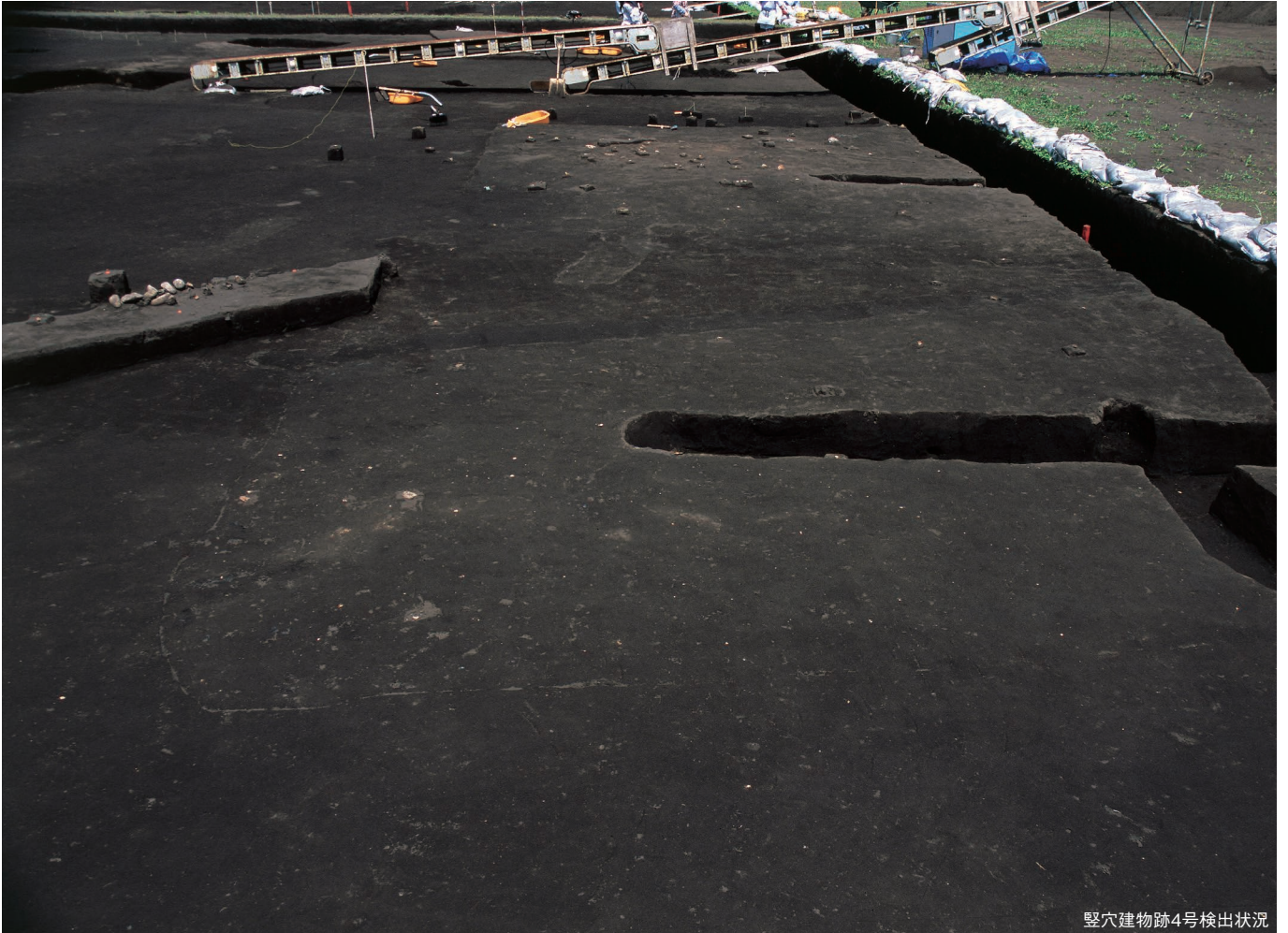
竪穴建物跡3号東西ベルト土層断面



竪穴建物跡3号南北ベルト土層断面



竪穴建物跡3号完掘状況



竪穴建物跡4号検出状況



竪穴建物跡4号炭化材検出状況



竪穴建物跡4号東西ベルト土層断面



竪穴建物跡4号南北ベルト土層断面



豎穴建物跡4号遺物出土状況



豎穴建物跡4号遺物出土状況



豎穴建物跡4号中央炉断面



豎穴建物跡4号ピット4断面



豎穴建物跡4号土坑1断面



豎穴建物跡4号ピット8断面



豎穴建物跡5号遺物出土状況



豎穴建物跡5号炭化材・焼土出土状況



豎穴建物跡5号西北部炭化材・焼土検出状況



豎穴建物跡5号炭化材・焼土出土状況



豎穴建物跡5号遺構内遺物出土状況



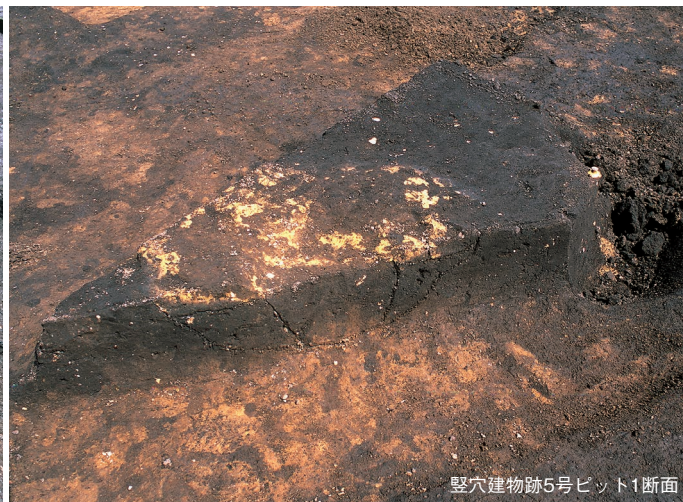
豎穴建物跡5号遺構内遺物出土状況



豎穴建物跡5号土器溜り



豎穴建物跡5号完掘状況





竪穴建物跡6号検出状況



竪穴建物跡6号作業風景



竪穴建物跡6号遺物出土状況



竪穴建物跡6号磨製石器出土状況



竪穴建物跡6号完掘状況



竪穴建物跡7号検出状況（北側）



竪穴建物跡7号検出状況（南側）



竪穴建物跡7号遺物出土状況



竪穴建物跡7号土層断面



竪穴建物跡7号完掘状況



竪穴建物跡7号土坑1検出状況



竪穴建物跡7号ピット10根石出土状況



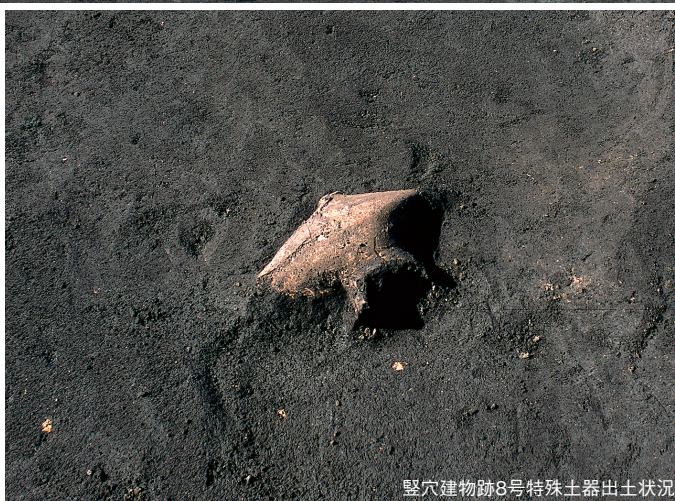
豎穴建物跡8号検出状況



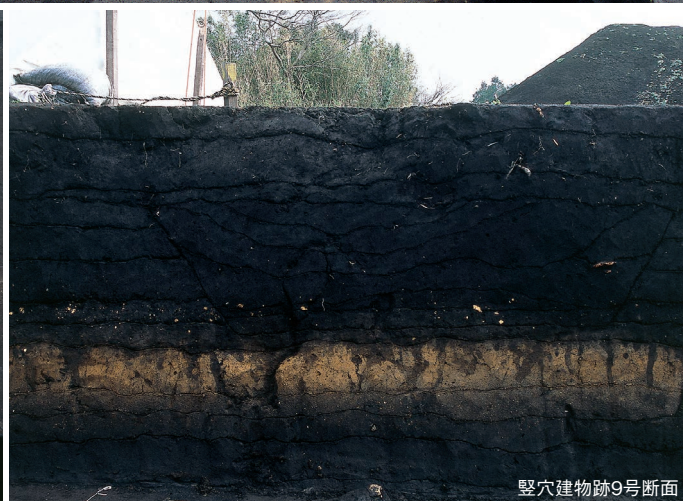
豎穴建物跡8号炭化材出土状況



豎穴建物跡8号炭化材出土状況



豎穴建物跡8号特殊土器出土状況

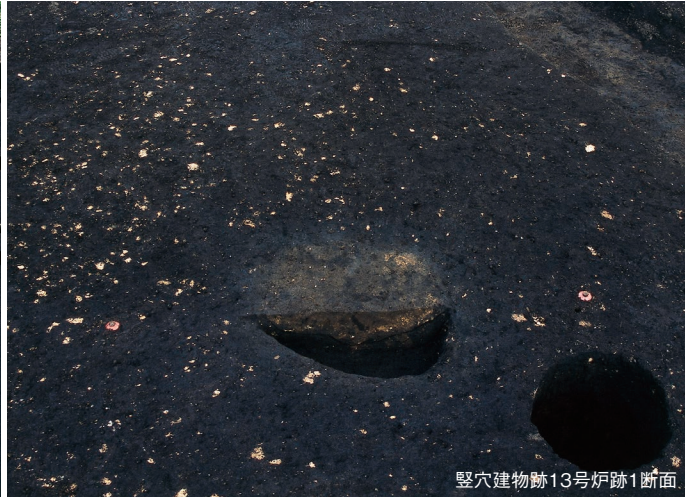








竪穴建物跡4・13号遺物出土状況



竪穴建物跡13号炉跡1断面



竪穴建物跡13号南北ベルト土層断面



竪穴建物跡13号完掘状況



豎穴建物跡14号床面遺物出土狀況



豎穴建物跡14号完掘狀況



豎穴建物跡15号検出狀況



豎穴建物跡15号完掘狀況



豎穴建物跡16号土層断面



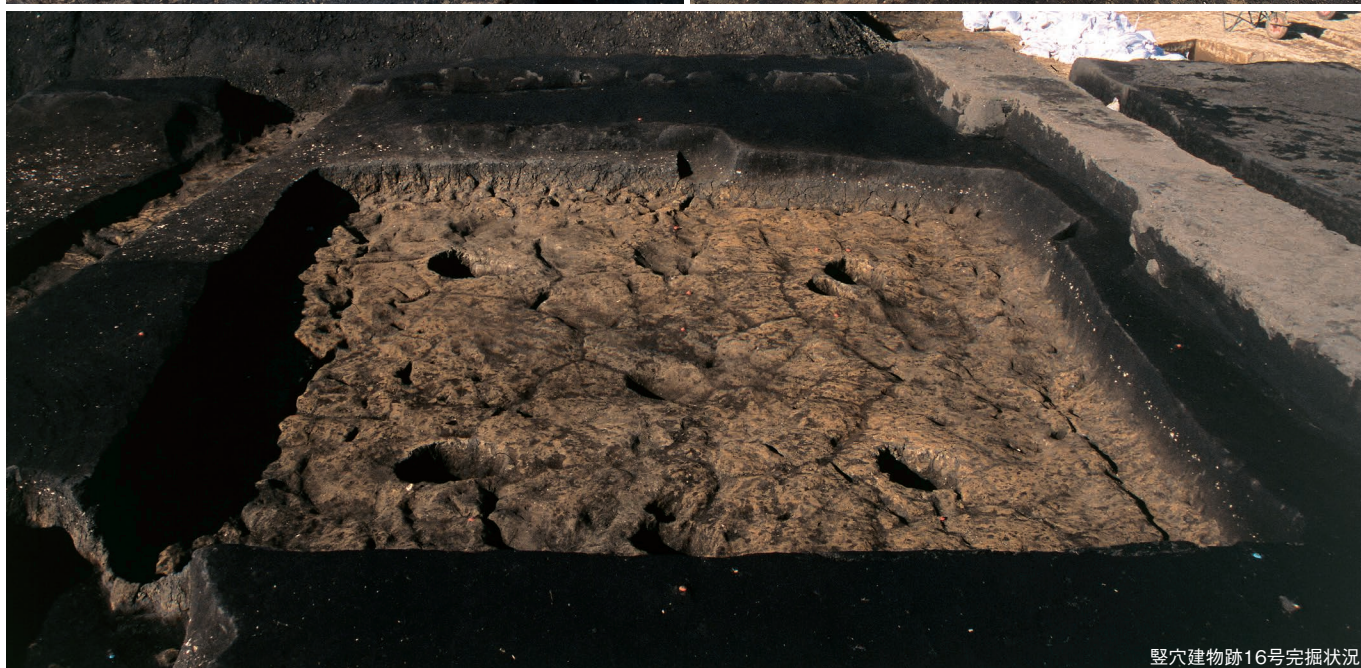
豎穴建物跡16号床面直上遺物出土状況



豎穴建物跡16号壁帯溝及び柱穴検出状況



豎穴建物跡16号炉跡半截状況



豎穴建物跡16号完掘状況



竪穴建物跡17号検出状況



竪穴建物跡17号南北ベルト土層断面



竪穴建物跡17号床面検出状況



竪穴建物跡17号床面ピット等検出状況



竪穴建物跡17号ピット1断面



竪穴建物跡17号完掘状況



竪穴建物跡17号ピット2断面



竪穴建物跡18号検出状況



竪穴建物跡18号東西ベルト土層断面



竪穴建物跡18号南北ベルト土層断面



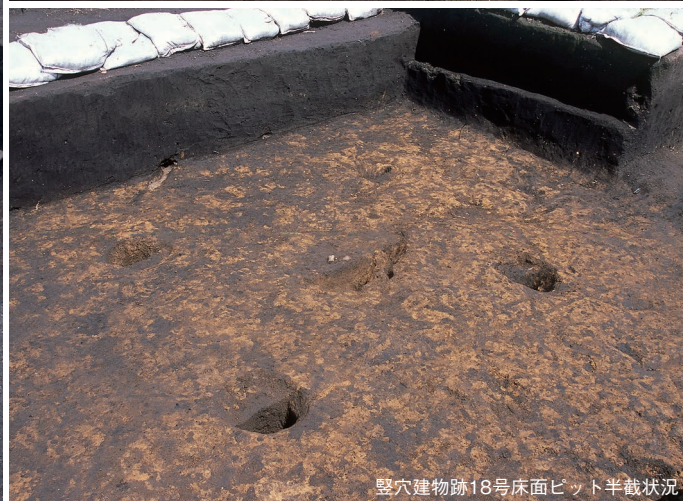
竪穴建物跡18号遺物出土状況



竪穴建物跡18号遺物出土状況



竪穴建物跡18号床面遺物検出状況



竪穴建物跡18号床面ピット半截状況



竪穴建物跡18号完掘状況



竪穴建物跡19号検出状況



竪穴建物跡19号床面遺物出土状況



竪穴建物跡19号床面ピット検出状況



竪穴建物跡19号完掘状況



豎穴建物跡20号遺物出土状況



豎穴建物跡20号土層断面



豎穴建物跡20号床面土坑検出状況



豎穴建物跡20号ピット1断面



豎穴建物跡20号完掘状況



掘立柱建物跡1号検出状況



掘立柱建物跡1号ピット半截(西側)



掘立柱建物跡3号完掘状況



掘立柱建物跡3号完掘状況



掘立柱建物跡2号検出状況



掘立柱建物跡2号完掘状況





掘立柱建物跡5号ビット1半截状況



掘立柱建物跡4号ビット6半截状況



掘立柱建物跡5号ビット半截



掘立柱建物跡5号半截



掘立柱建物跡6号ビット断面



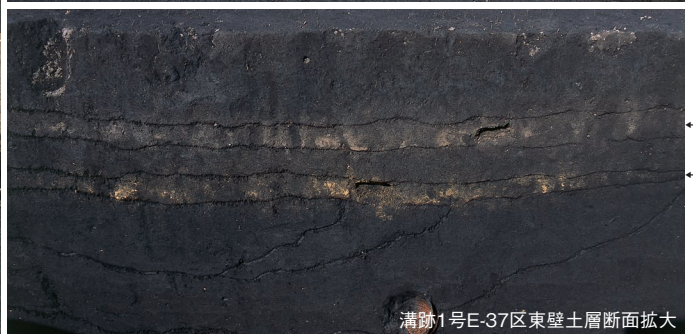
溝跡1号検出状況



溝跡1号検出状況



溝跡1号E-37区東壁土層断面



溝跡1号E-37区東壁土層断面拡大

← 紫コラ
← P 4 火山灰



溝跡1号C-36区土層断面



遺物溜り2・3号出土状況



遺物溜り4号出土状況



遺物溜り1号出土状況



遺物溜り11号出土状況



遺物溜り9号出土状況



溝跡1号完掘状況



溝跡1号全景





地下式横穴墓1号検出状況



地下式横穴墓1号土層断面



地下式横穴墓1号半截状況



地下式横穴墓1号アカホヤ土塊ブロック検出状況



地下式横穴墓1号完掘状況



古墳時代終末期、古代の掘立柱建物跡完掘状況



掘立柱建物跡12号検出状況



掘立柱建物跡12号ピット断面



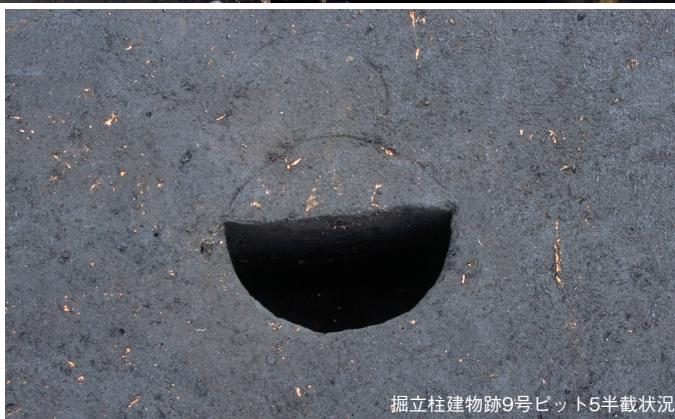
掘立柱建物跡13号検出状況



掘立柱建物跡10号ピット断ち割り



ピット列1号半截状況



掘立柱建物跡9号ピット5半截状況



掘立柱建物跡8号ピット2半截状況



焼土1号検出状況



天守城跡

堀跡と天守城跡